
最後の告白

川嶋紗矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の告白

【Nコード】

N3611F

【作者名】

川嶋紗矢

【あらすじ】

恋の切なさや、人の心の温かさ、人の痛みなどをテーマとした小説です。主人公が初めて人を愛して、悩みながらも、少しずつ成長してゆく…その過程を主人公自身が振り返ります。あまり長くならない予定です。長い文章が苦手な方もぜひ読んで見て下さい。

1・「関係ない」(前書き)

この小説はフィクションです。また、リストカットなどの描写が含まれるため、苦手な方は閲覧をご遠慮下さい。

1. 「関係ない」

あたしは、いつまで、こんな紙切れを大事そうにとっておいてるんだろう。

「ごめん」と書かれた、へんてこなキャラクターのメモ紙。そんなにこれが大切なのか…。

ほんと…

馬鹿みたい。

いつまでも思い出にしがみついて…。思い出の中を生きることなんて、出来ないのに…。

1年経った。

好きだと伝えた

あの日から。

会えなくなつて…

半年かな。

学校もバラバラで、メアドを交換する勇氣も無くて。

臆病なあたしは

アルバムの中を行ったり来たりして、ただ泣いた。

卒業式でさえも、
涙なんか一滴も流さなかつたくせに、ほんと強がり。

あのとき、
涙ひとつ流せば、
何か変わったかな。

…きつと、
何も変わらない。

好き、それはいらぬ感情。

同じクラス、
隣の席、
他愛もない会話、
それだけで
良かった。

好き、気付かなければよかった、そんな感情。

あの人に可愛い彼女ができたとき、あたしはなんて言ったっけ。

よかったね？、
おめでとう？、
それとも…

どれにしても、

笑えない。

あの人に彼女ができる前、ある噂が流れた。

あたしとあの人が付き合っているという噂。

あの人のことを好きだった子に、逆恨みされたこともあった。

あたしはなるべく誤解されないように、あの人を避けた。

あなたには関係ない。

いきなりそう叫んだこともあった。

話しかけられても、

無視した。

噂を流していたのは、

あたしの友達だった。

「ごめんね。」

一応、彼に謝った。

彼は無表情で

「なんで謝るの？」と訊き返した。

「噂のこと。」

あたしも無表情でそう言った。

彼は、それから黙ったままだった。

あたしも、もう一言もしゃべらなかった。

2・「忘れてる」

要らない感情の存在に気付いたのはいつだったけ？

…クラスが離れたときだったけ？

廊下ですれ違ったとき、いつの間にか目で追ってたのを覚えてる。

そのとき、あたしの隣にはあの人の彼女もいて。

あたしと同じように、あの人のこと一生懸命目で追ってたっけ。

その横顔は、あまりにも幸せそうで、あたしは。

今でも思う。

もし、ずっと同じクラスだったなら、馬鹿みみたいな感情に振り回されずに、ずっと隣にいれたかなって。

今のあたしは友達以下。

きつと、他人。

ううん、それ以下かな。

だって、もう忘れてる。

あの人の中に、あたしはきつと存在しないから。

二年生のときかな。

あの人と彼女と別れたと聞いたときは、別に嬉しくなかった。

またすぐ新しい彼女ができると思っていたから。

あたしは大して可愛くない。

性格も歪んでいた。

だから彼女になりたいなんて、最初から望んでなかった。

諦めてた。

ただ、せめて、

友達でいたかった。

それだけは、

諦め切れなかった。

同じ学校にいるのに、ただクラスが違っただけで、あたしは怖かった。

あの人に忘れられること。

ほんと…くだらないね。

でも、真剣だった。

好きな人、
いないのはつまらない。

そう思ってた。

だから、いつもテキストに誰かの名前を挙げて、毎日のように恋バナで盛り上がった。

それでよかった。

好きな人、いない方が楽。

そう思ったのは、再びあの人と同じクラスになったときだった。

嬉しかったんだと思う。

また前みたいに、いっぱい話したくてしょうがなかった。

毎朝、何て話しかけようかと考えながら、教室に入った。

そのくせ、おはようも言えなくて、結局何も話せない日々が続いた。

3・「恨んでた」

背、伸びたね

同じクラスになって、何日も過ぎた頃、勇気を出してあの人に話しかけた。

心臓が壊れそうだった。

前と少しも変わらない笑顔で、このときあの人なんて言っただけ。

ドキドキしすぎて、忘れてしまった。

でも、言葉に出来ないくらいに嬉しかったのは覚えてる。

嬉しくて、その日は一日、顔が緩みっぱなしだった。

親友から無理やり聞きだした好きな人、それはあたしが好きなあの人がだった。

その名を親友の口から告げられた時、あたしは笑って、いつものように嘘をついた。

別に何とも思っていない人を好きな人に仕立て上げて、恋する乙女を演じてた。

偽りの恋は

案外楽しかった。

でも、本当の恋はそんなに穏やかなものじゃなかった。

そんなに美しいものじゃなかった。

少なくとも、あたしにとってはそうだった。

親友にあの人のことを問い詰められて、必死に好きじゃないと否定しながらも、あたしは心のどこかで彼女を恨んでいた。

先に告げてしまえばよかったと思った。

本当の気持ちを。

けど、そうすれば、今度はきっと彼女が自分の気持ちに嘘をつくことになったかもしれない。

それでも構わないとは、
とても思えなかった。

親友はあの人ととても仲がよかったと思う。

2人は隣の席になることが多くて、よくあたしの席まで2人の笑い声が聞こえてきた。

あたしは親友の気持ちを知っていたから、彼女はあたしの本当の気

持ちを知らなかったから、どうすることも出来なかった。

もし、あの人があたしのことを好きだったら…と、ありえない仮説を立てながら、あたしはいつも虚しい青春に苦笑してた。

4・「失敗だった」

この三年間は、
失敗だった。

そう父親がつぶやいたのは受験真っ只中のあの日。

すべてを
否定された気がした。

あたしが必死で生きてた三年間を、失敗だと決め付けた父。

結局彼には
何も届いてなかった。

もう、どうでもよくなった。

いつも5位以内をキープしていた成績も、受験も、恋も。

何もかも手に入らない気がしてた。

誰にも認められない気がしてた。

愛することがどういふことなのかも見失ってた。

何もかも諦めて、何も感じない心を求めてた。

そんなあたしが選んだ道は、

リストカット。

軽蔑されることを覚悟で、手首を切った。

理由なんて無かった。

ただなんとなく…この表現が一番合っている。

今思えば、

訴えたかったんだと思う。

自分はリスカするぐらい
苦しんでいると。

他の奴らとは違つと。
だから助けてくれと。

…ただ甘えてた。

嫌われればいいと思った。

親友にも。

あの人にも。

このとき、あたしは初めて友達さえも本気でいらなと思った。

人間が、信じられなくなっていた。

たくさん騙されて、

たくさん裏切られて、
疲れてた。

自分にも何の価値も感じられなくなっていた。

だから、

カッターナイフが
手放せなかった。

リスカをやめてから気付いたのは、あの子のあたしは完全に狂っていたということ。

後悔は今もまだ消えない。

傷跡も消えない。

きつと、この先ずっと、

一生消えないんだと思う。

それでもあたしは生きたいから、もうリスカはしない。

うっん、

生きたいからじゃない。

生きなきゃいけないからだ。

両親を、親友を、裏切った罪を償うためにも…。

親友とあの人、
いつそくっ付いてしまえばいいと思った。

そうすれば、
諦められるから、
近くにいられるから。

そう考えて、あたしは親友の告白を手伝った。

汚い。

あたしは、汚い女だった。

ただ、親友を利用しようとしてただけ。

結局すべては自分のため。

他人のことなんか考えられない。

あたしは、

そんな人間だった。

そんな自分に嫌気がさして、手首の傷はまたひとつ、またひとつと

増えていった。

人の痛みが
分からなかった。

心がどうしようもなく
弱かった。

リスカはそんなあたしを
何度も救ってくれた。

こんなこと間違ってるって分かった。

けど、このときのあたしは、自分を傷つけること以外に生きる術を
失っていた。

5・「頑張つて」

町の小さな夏祭り、
行く気なんてなかった。

でも、行つた。

あの人があるかもしれないと期待しながら…。

来て良かった、
そう思った。

あの人に会えたから。

ずっと目で追つてた。

少しだけど、
話すことも出来た。

ものすごく
幸せな時間だった。

いちいち興奮してる自分に呆れながらも、やっぱり幸せだなんて、
このときは思えた。

親友は、
あの人にふられた。

夏祭りの日に。

付き合っただとばかり思ってたあたしの気持ちが、大きく揺れた。
あんなに仲が良かったのに、彼女の気持ちはあの人には届かなかった。

それが悔しくて、内心ホツとしている自分にも腹が立って、なんとも言えない気分だった。

彼女は、あたしの本当の気持ちを知らない。

あたしが
本当は誰を好きなのか。

嘘をつき続けるのは、
もうやめようと思った。

嘘は嘘でしか隠せない。

だから、本当のことを知ってもらおうと、嘘ついてごめんと謝ろうと、あたしは彼女にメールを送った。

ごめん、

本当はあたしも、

あの人のことが好きだった

このメールを読んだときの彼女の表情も心境も、あたしは何一つ予想できない。

彼女からの返事は

「頑張つて」という一言。

本心だったのか、無理をしていたのかは分からなかったけど、あたしは彼女の気持ちなんて全く考えていなかった。

まだ子どもだったから、

人の痛みを理解することが出来なかった。

所詮それはただの言い訳。

あたしは、

救いようがないくらい、

醜い人間だった…。

親友の告白から時間が経って、あの人と親友の笑い声が再び聞こえるようになったころ、季節は秋だった。

嘘をついていたにも関わらず、彼女は全くあたしを責めなかった。

むしろ、あたしの恋を、
全力で応援してくれていた。

あたしはその優しさに甘えて、彼女の気持ちを完全に無視していた。

毎日、毎日、彼女の前であの人の話をした。

それを、彼女は
黙って聴いていた。

彼女は歌を歌うのが
好きだった。

昼休み、あまり人の通らない非常階段で、歌ったり、笑ったり、色んな話をした。

彼女は、
いつも笑顔だった。

誰に対しても、
どんな時でも、
笑顔を絶やさなかった。

あたしは、ずっと彼女と過ごしてきた時間の中で、笑顔以外の彼女の表情が思い出せない。

彼女のおかげであたしは、あの人に想いを伝える勇氣を持てた。

今でも、感謝してる。

いつでも自分の気持ちを押し殺して、あたしのことばかりに真剣だった彼女。

そんな彼女に
出会えたこと。

これ以上ないくらいの奇跡だと、馬鹿みたいにそう信じてる。

6・「11めん」

好きです。

10月1日。

あたしは、

あの人に手紙を書いた。

あの人の答えは

分かってた。

ただ、伝えなかった。

そうしないと、今にも心が壊れそうだった。

このとき、もし拒絶されることを恐れて、想いを閉じ込めたままだったら、あたしはこの先、一生後悔することになったかもしれない。

ごめん。

10月5日。

帰る準備をしようと、鞆を開けた瞬間一枚の紙切れ。

開いてみると、

それは告白の返事だった。

ごめん、

他に好きな人がいる

短い文書に

涙が零れ落ちた。

涙が、止まらなかった。

分かっていたはずなのに、覚悟していたはずなのに、どうしようもなく悲しかった。

近くの男子が、いきなり泣き出したあたしにびっくりしてたのを覚えてる。

そのとき遠くの席であの人は、下を向いて、困ったような顔をしていたと思う。

「ごめん」の言葉の意味をあたしは理解できなかった。

彼が謝る必要なんて

全く無かったから。

それは、余計な感情を持ってしまったあたしが言わなきゃいけない言葉だったから。

文化祭、あたしのクラスは劇をした。

練習中、あたしはマットの上ではしゃいで頭を思い切り天井にぶつけた。

偶然近くにいたあの人は、また昔みたいに笑い飛ばしてくれた。

嬉しかった。

あの人の笑顔。

なのにあたしは素直になれなくて、一言も言葉を交わさず、その場を離れた。

どうしようもない気持ちを、これ以上大きくしたくなかった。

あたしはどこまでも
臆病者だった。

成績が下がった。

毎日のように
説教が繰り返された。

毎晩泣いた。

誰にも愛されていない、この世でたった一人かもしれない。

大げさだけど、
そう思ったこともあった。

勉強の合間に、
手首を切った。

血があたしの心を
鎮めてくれた。

そして、また泣く。

その繰り返し。

何も変わらない。

成長しないあたしの心。

自分だけが不幸なんだと思いこんで、人の痛みなんて理解しよう
ともしていなかった。

まるで、悲劇のヒロインにでもなったかのように。

7・「好きです」

好きです。

付き合ってください。

生まれて初めて

告白された。

二つ年下の子だった。

このときもまた、あたしは彼の気持ちを考えることは出来なかった。

彼の告白を冗談で流して、曖昧な返事をした。

彼を傷つけることが怖かった。

あたしが告白したあの人は、ちゃんと返事をしてくれた。

なのに、あたしは弱虫だから、はっきり断ることが出来なかった。

そのせいで、あたしは彼に余計な苦しみを与えてしまったかもしれない。

それ以来、彼からメールが届くことはなくなった。

時は過ぎて、卒業の日。

告白された彼から
メールが届いた。

「卒業おめでとうございます。」

半年ぶりのメールだった。

「ありがとう。」

そう一言返した。

返事はもう、
返ってこなかった。

卒業式のこととは、
もう記憶にない。

唯一記憶に残ったのは、
「旅立ちの日に」という歌。

涙を必死に堪えた。

声が震えてた。

女子のすすり泣く声と、男子の低い歌声が、しばらく耳から離れな
かった。

もう、会えないんだ…。

そう思いながらも、その意味を、このときのあたしは全然理解して
なかった。

合格発表の日、あたしのクラスは全員合格だった。

本当によかった。

たくさんの人に

おめでとうをもらった。

素直に嬉しかった。

けど、心は晴れなかった。

何をしても、あの人のことが頭から離れなかった。

会いたい、

話したい、

と、ワガママばかりが出てくる。

結局あたしは、

さよならも、

おめでとうも、

ありがとうも、

ごめんなさいも、

何一つ、言えなかった。

そのことが、ずっと心に突っかかった。

このままあの人が、記憶の中であたしの存在を消してしまふことが、とても恐ろしかった。

怖くて

悲しくて

苦しくて

どうしようもなくて、

ただ、泣いた。

8 「ありがとう」

ねえ、の好きな人って誰？

一年生の時、そうあの人に訊いたことがあった。

このとき、あの人は何て答えたっけ…。

きつと、何も答えずに、いつものように黙り込んでたね。

前に、進めない。

思い出が、多すぎる。

涙が、足りない。

一万回涙流せば、

あの人のこと

忘れられる気がしてた。

でも、きつと一万回目の涙のあとを、一万一回目の涙はすぐに伝う。

あの人を好きになって、

あたしは人を

たくさん傷つけた。

あたしの無神経な行動は、いつも人を痛めつけた。

その戒めに、手首の傷で人を遠ざけようとしてたのかもしれない。

誰も近づかないように、

誰も傷つけないように。

人に依存していながら、

人を拒絶しようとしてた。

そんなのできっこないって分かってたのに…。

人を好きになることを

恐れてた。

でもそれじゃあ、
何も変わらない。

変わりたい。

でも、あの人のことを
忘れることが出来ない。

結局、あたしはあの人に何を伝えたかったんだろう。

好きという気持ち？

彼女になりたいという気持ち？

違う。

友達でいたかった。

どんなかたちでも
そばにいてほしかった。

笑ってほしかった。

告白のことは、
後悔してない。

けど、あたしが一番伝えたかったのは、

「好き」

という言葉じゃない。

あたしはあの人に、
たくさん、感謝してる。

だから。

伝えたかった言葉は、最初から分かってたはずなのに、今更、気付いた。

あたしは友達に頼んで、一通のメールをあの人に送ってもらった。

「最後の告白を
させてください。

もうひとつだけ、
伝えたいことがあります。

色んなことを教えてくれて

たくさんワガママに
付き合ってくれて

笑ってくれて

励ましてくれて

話しかけてくれて

無視しても、

怒らないでいてくれて

告白の返事を返してくれて

たくさん、ありがとう。

今更だけど、

本当に、ありがとう。」

携帯の画面を涙で濡らしながら、一生懸命に文字を打った。

やっと、心が晴れた。

一番伝えたかった言葉は

「ありがとう」

だった。

「この三年間は失敗だった。」

ふと父の言葉が
頭を過ぎった。

失敗なんかじゃない。

今なら、
自信を持って言える。

確かに、成功ではないかもしれない。

あたしは、リストカットに溺れてしまったし、他人もたくさん傷つ
けた。

でも、
失敗なんかじゃない。

何も知らなかったあたしが、人を愛することができた。

人を愛することがどういふことなのかを、知った。

臆病だったあたしが、自分の気持ちを伝える勇気を持てた。

自分勝手だったあたしが、人の痛みに気付けるようになった。

そんなこと、

父にとつては意味のないことかもしれない。

やっぱり失敗だったな、って言うかもしれない。

でも、少なくともあたしにとつては、大切な三年間だった。

大切な、

大切な宝物だった。

それは、

これからもずっと。

あの人 gave くれた宝だから。

親友がくれた宝だから。

たくさんの人からもらった宝だから。

失くしちゃいけない。

忘れちゃいけない。

リスカの過去も、たくさんの人を傷つけてしまった過去も全部。

思い出になっても、

もう戻れなくても、

確かにそこにあつた日々だから。

あたしは、

死ぬまで一生、はなさない。

携帯の着信音が鳴った。

震える手で携帯を開いた。

（ 。 。 ） じやじや

もう、涙は流れなかった。

いっしょにいそ、

ありがとうね、

幸せな日々を。

8・「ありがとう」(後書き)

「最後の告白」は、完全にフィクションということではありません。一部実話も織りまぜてあります。青春時代の色々な感情を出来るだけリアルに描こうと努めました。ご感想など頂けると嬉しいです。最後までこのような駄文に付き合って下さり本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3611f/>

最後の告白

2010年10月28日08時32分発行